

パナマの新聞に寄稿の掲載が始まる

昨年、パナマを訪れた際に話が進み、パナマの新聞「パナマアメリカ」にスペイン語でエッセイを寄稿することになりました。内容はラテン・アメリカと日本の文化比較を中心としたものです。メキシコもパナマも同じ土壌にあり、本誌(「旅たび東洋」)に連載中の記事とも共通するものがありますので、ときどきここからも引用してみたいと思います。まずは第1回(2007年12月30日付け)の一部(序文)の紹介から。

ラテン・アメリカと日本の文化比較について寄稿の機会を与您とてくださり感謝しております。私は現在66歳。日本の東京に住んでおります。1976年から85年まで10年間、聖教新聞の特派員としてパナマに駐在しました。同紙は日本で最も大きな宗教団体・創価学会の機関紙で発行部数は日刊550万部です。SGI(創価学会インタナショナル)は現在、世界190カ国・地域にメンバーがおり、パナマSGIもその一つです。

日本に戻ってからは同新聞本社の編集部で記者としての仕事を続けました。2001年に60歳で定年退職、2年目には、もう一度スペイン語とスペイン文化について学ぼうと、スペインのマラガ大学に留学しました。

スペインに行った理由？

それは特派員としてラテン・アメリカを回っていたとき、これらの国の文化の原点はスペインである、ということを目の当たりにしてきたからです。以来、いつかスペインを訪れてその原点に触れたい、とりわけ近代西洋文学の原点とも言われるセルバンテスの「ドン・キホーテ」について勉強したい、との夢からです。

スペインでの1年間はとても実りある充実したものでした。現地のスペイン人また大学で同じクラスにいたヨーロッパの仲間との交流は面白く刺激的でした。日本に戻ると、定年退職者がその後の生き方を模索しているのを見て、私は「定年留学してみませんか?—60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ—」という本を出版しました。それは自分のホームページにも日本語とスペイン語で載せています。このことが契機となって、私は世界の文学作品の舞台をめぐる旅を開始しました。2005年には、出版400周年を迎えた小説「ドン・キホーテ」の取材のため、再びスペインを訪れました。2006年には、出版70周年となった「風と共に去りぬ」の舞台であるアトランタとニューオーリンズを訪ねたのです。明年は出版100周年となる「赤毛のアン」の舞台カナダを訪れる予定を立てています。

幸運にも本年11月、私は大好きなパナマを再び訪問する機会に恵まれました。懐かしい多くのパナマの友人との再会や、この20年間にパナマ市が大きく変わった姿を見ること大変な感動と感激でした。

パナマと日本の関係はこれまでとてもよかったと思います。しかしながら、お互いに輸出や輸入の製品や商品以外に、遠くにある国のこと、市民のこと、文化のことについてはよく知らないのが現状だと思います。実際、ラテンアメリカと東洋の間には、いろんな違いが横たわっているのです。

他国の文化や習慣、人々の生活や考え方について理解を深めることは、政治や経済分野の関係もより強くしていくことは間違いありません。そこで、両国の友好関係と相互理解を深めていくのに少しでもお役に立てればとの思いから、ラテン・アメリカと日本の文化や生活の違いの随筆を掲載させていただくことになった次第です。(以下略:スペイン語の記事全文は私のHP「Página en Español—Don Quijote, montado en un avión」に載っています。URLは<http://homepage2.nifty.com/donky>です)



「パナマアメリカ」の掲載紙面